

問題

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(50点)

☑ チェック

1 鎌倉武士、入道して***高野**の蓮華谷に行ふありけり。**問四**この者が寝る所にて、夜な夜な女と物語をしける音のしければ、

具したりける弟子ども、1おほかた心得がたくて、***便宜**のありけるに、ある弟子、この入道に尋ねたりければ、「さる事あり。我が女の鎌倉にありしが、夜な夜なこれへ来る**w**なり。それに何事も言ひ合はせ、また、2ふるさとの事のおぼつかなさも語り、**x**世間の事もはからひなどしてある**x**なり」と言ひければ、弟子、いふはかりなくふしぎにおぼえて、

5 ***空阿弥陀仏**にありのままに申しければ、空阿弥陀仏うち**Y**案じて、「さる事も多くあり。この女のいたく恋ひしく思ふによりて、**魂**などの通ふ**a**にこそ。この***定****y**ならば、***臨終**の妨げにも**z**なりなんぞ。急ぎ祈るべきぞ」とて祈られけり。ある時に、「念仏にて祈りてみん」とて蓮華谷の聖、三、四十人ばかりめぐり居て、この入道をなかに据えて、念仏を*責め伏せて申したるに、入道も同じく申しけるが、空阿弥陀仏の秘藏の本尊の、***帳**に入りたるがおはしましける、そのかたをつくづくともりて、おそろしげに思ひて、わなわなとふるひければ、空阿弥陀仏、よりて、「など**3**お

10 そろしげに思ひたるぞ」と問へば、**問六**「その御本尊の御前に、かの女房がまうで来て、我を世にうらめしげ**b**に見て候ふが、などやらん、あまりにおそろしく」と申しければ、その時、空阿弥陀仏、「***門々**不同八万四、為滅無明果業因、利剣即是弥陀号、一声称念罪皆除」と、たかく誦せられたりければ、この女の顔の、中より二つにわかれて、散るやうに見えて失せ**c**にけり。これをば人は見ず、ただ入道ばかり見て、いとどおそろしくて、つんつんとかみへ躍りたるが、その後はもとの心になりて行ひけり。**問八**念仏の力のたふとき事、いとど人々たふとびあひけり。本体の女は、つやつやさる事なくて、もとのやうに鎌倉にありけりとぞ聞こえし。天魔のしわざか、また、女の恋ひしと思ひけるがゆゑにか、いと**A**。

問四
文脈を踏まえて登場人物の状況を押さえる

問六
文脈を踏まえて登場人物の状況を押さえる

問八
仏教説話の展開を踏まえて読む

注 **問四** *高野の蓮華谷⇨仏教の聖地、高野山にある谷の一つ。 *便宜⇨よい機会。好機。 *空阿弥陀仏⇨高野山の高

僧。 *定⇨様子。 *臨終⇨死に臨んで極楽往生を願うこと。 *責め伏せて⇨激しい調子で行って。 *帳⇨垂
れ布。 *門々不同…⇨仏典の一節。阿弥陀仏の名を唱えれば救われる、と説いている。 *帳⇨垂

問一 波線W～Zについて、次の(i)(ii)に答えよ。

(i) 波線W～Zのうち、一つだけ他とは文法的に異なるものがある。その記号を記せ。(2点)

(ii) (i)で挙げたもの以外に共通する三つの語を、文法的に説明せよ。(2点)

問二 傍線a～cの文法的説明として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ(同一記号の反復使用不可)。(6点)

- | | | | |
|----------|------------|---------|---------|
| ア格助詞 | イ接続助詞 | ウ完了の助動詞 | 工断定の助動詞 |
| オ動詞の活用語尾 | カ形容動詞の活用語尾 | キ副詞の一部 | |

問三 傍線X・Yのここでの意味として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ。(6点)

- | | |
|------------------|-----------------|
| X ア世の中の出来事も話題にして | イ将来のことにも思いめぐらして |
| ウ暮らし向きのことにも相談して | 工親しい人に伝言などとして |
| Y アすぐに納得して | イあれこれ考えて |
| | ウ困ってしまって |
| | 工平静を装って |

問四 注を踏まえて解答要素に反映する

問一 文法事項を押さえる

問二 文法事項を押さえる

問三 多義語・古今異義語を文脈に沿って解釈する

問四 傍線 1 とあるが、どうして「弟子ども」は「心得がたく」思ったのか。簡潔に説明せよ。

(9点)

問五 傍線 2 を口語訳せよ。

(8点)

問六 傍線 3 とあるが、それはどうしてか。最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(6点)

- ア女の顔が二つに割れて粉々になって飛び散ったから。
- イ女房が姿を現して恨めしそうに見ていたから。
- ウ大勢の僧が集まって念仏を唱えて自分を責めたから。
- エありがたい秘蔵の本尊を初めて間近に見たから。

問七 A に最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(5点)

- アあはれなり
- イいたづらなり
- ウなほざりなり
- エふしぎなり

問八 問題文の主題を最もよく示している表現を、文中から十字以内で抜き出して記せ(句読点等も一字として数える)。

(6点)

出典

『今物語』三六「蓮華谷の念仏」

『今物語』は、鎌倉時代の説話集。全一卷、五十三編の説話が収め

られている。書名は「昔物語」に対して(新しい)物語とい

う意味合いで命名されたものと考えられる。編者は藤原信実。のぶまね

問四
傍線部を正確に解釈せよ。

問五
傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える。

問七
多義語・古今異義語を文脈に沿って解釈せよ。

解答

- 問一 (i) z (ii) 断定の助動詞「なり」
- 問二 aエ bカ cウ
- 問三 Xウ Yイ
- 問四 (女人禁制で) 女がいるはずのない仏道修行の場で (夜ごとに) 女の声が聞こえたから。
- 問五 故郷のことが気がかりであるということも話し
- 問六 イ
- 問七 エ
- 問八 念仏の力のたふとき事 (10字)

解説

今回の文章の概要

念仏の法力によって怪異を撃退した空阿弥陀仏

- ・高野山の蓮華谷に仏道修行に來た武士
- ・**女人禁制のはずが、夜ごとに女と話している声がする** (↓問四)
- ・鎌倉に住んでいるはずの妻が、毎夜通ってくるという
- ・高野山の高僧・空阿弥陀仏が、往生の妨げになる事態だと見抜く
- ・祈禱きとうを行い、魔を払おうとする
- ・現れた女の怪を、空阿弥陀仏が仏典の一節を唱えて撃退する
- ・武士はその後、平常心に戻って仏道修行に励むようになる
- ・念仏の法力のありがたさⅡ「念仏の力のたふとき事」(↓問八)

「法力の奇蹟きせき」と怪奇話がミックスされたストーリーとなっている。高僧の念仏の法力のありがたさを讀たえる結論を讀み取る。

重要表現

※太字の意味が、文中で使われている意味です。

ℓ 1行ふ「動詞」

- ①実行する
- ②処理する・おさめる
- ③仏道の修行をする・勤行ごんぎょうする

関連語

③の意味を持つ語として、他に「勤む」がある。

ℓ 1夜な夜な「副詞」

毎夜毎夜・夜ごとに

関連語

朝な夕な (≡朝晩に)・朝な朝な (≡毎朝)

ℓ 2具す「動詞」

- ①同行する・つき従う
- ②備わる
- ③連れ添う

参考

サ変複合動詞は、「漢字+す(ず)」の形で現れる。漢

字を音読みしている場合はサ変複合動詞の場合が多い

ので、識別の目安となる (例 具す・愛す・死す・奏

す・案す)。

ℓ 5いたく「副詞」①ひどく・はげしく

- ②「打消語を伴って」それほど(……ない)

要点

形容詞「いたし」の連用形が転じてできた語。

ℓ 9まもる「動詞」①じっと見つめる ②守る・大事にする

要点

「目」+「守る」からなり、目を離さず見守るが

原義。

ℓ 9など「副詞」どうして・なぜ

ℓ 14つやつや「副詞」①つくづく ②すっかり・完全に

③「打消語を伴って」少しも(……ない) 参考 ③の意味を持つ語として、他に「おほかた」(㉞2)、「つゆ」、「ゆめ」などがある。

㉞15ゆゑ(故)「名詞」 ①原因・理由 ②風情・趣おもむき ③由緒

☑ 文法事項を押さえられたか

問一 「なり(なら)」の識別問題。

● 「なり」の識別

①ラ行四段活用動詞「なる」の連用形

- ・ 文節の頭にあり、述語となる。
- ・ 〈……になる〉〈……となる〉の意味を表す。

②断定の助動詞「なり」

- ・ 体言・連体形に接続する。
- ・ 〈……である〉の意味を表す。

③伝聞・推定の助動詞「なり」

- ・ 終止形(ラ変型活用語は連体形)に接続する。
- ↓ラ変型活用語に接続する場合は、文脈から断定か伝聞・推定かを区別する。

- ・ 人の話や音を根拠にして推定する助動詞で、〈……だそうだ〉〈……のようだ〉の意味を表す。

④形容動詞(ナリ活用)の活用語尾

- ・ 直前に、語幹となって状態を示す語がある。

・ 語幹となる部分は、独立させても主語にならない。
(例) 花なり↓「花」は名詞なので主語になる
花やかなり↓「花やか」では主語にならない

W 力変活用動詞「来」の連体形「来る」に接続しているのが、②の用法。ここは〈夜ごとにここへやって来るのである〉と訳せることからも、②の用法でよいと確認できる。

X はラ変活用動詞「あり」の連体形「ある」に接続しているので、②③の用法の可能性がある。ここは男が女との会話の内容を説明している場面で、〈相談しているのである〉と訳せることから、②の用法。

Y 「定」という体言に接続しているので、②の用法。
Z ここは〈妨げにもなる〉と訳せるので、①の用法。直後に連用形接続の完了・強意の助動詞「な(ぬ)」が続いている点とも矛盾しない。以上から正解は、(i) z、(ii) 断定の助動詞「なり」となる。

☑ 文法事項を押さえられたか

問二 「に」の識別問題。

● 「に」の識別

①格助詞

- ・ 体言・連体形に接続する(連体形に接続する場合は、その連体形の後に体言が補える)。

②接続助詞

- ・ 連体形に接続する(連体形の後に体言を補えない)。

③完了の助動詞「ぬ」の連用形

- ・連用形に接続する。
- ・後に過去の助動詞「き」「けり」などが続くことが多い（例にき・にけり）。

④断定の助動詞「なり」の連用形

- ・体言・連体形に接続する。
- ・後に「候ふ」「侍り」「あり」などがくることが多い。

⑤形容動詞（ナリ活用）の連用形活用語尾

- ・直前に語幹となつて状態を示す語がある。

⑥ナ変活用動詞の連用形活用語尾

- ・「往い（去い）に」「死いに」のみ。

⑦副詞の一部

- ・活用せず、上の語と切り離せない。

a 四段活用動詞「通ふ」の連体形「通ふ」に接続しており、直後に係助詞「こそ」があることから、④の用法で、後に結びの語「あれ」が省略されていると推測できる。ここは〈魂などが通つて来るのである〉と訳せることから、④の用法でよいと確認できる。正解はエ。

b 直前に「げ」がある点が決め手。「げ」は接尾語で、形容詞などに付いて、形容動詞の語幹を作る。「うらめし」は形容詞だから、「うらめしげなり」でナリ活用の形容動詞ということになる。よって、bは⑤の用法で、正解はカ。

c 下二段活用動詞「失うす」の連用形「失せ」に接続し、直後に過去の助動詞「けり」が続いて「にけり」の形になっていることから、③

の用法。正解はウ。

☑ 多義語・古今異義語を文脈に沿って解釈できたか

問三

Xを含む会話文では、男が鎌倉に残してきた妻（＝「我が女の鎌倉にありし」と話している内容が話題になっている。「世間」は〈①俗世 ②世の中・世の中の人 ③周囲・外界 ④暮らし向き・生活〉の意味。「はからひ」は〈①取り計らい・計画 ②考え・判断 ③相談〉の意味。複数の意味を組み合わせて解釈することになるので悩むところであるが、ここは、鎌倉に残してきた妻＋「世間の事」＋「はからひ」をセットで考えると、ウ「暮らし向きのこと相談して」と解するのが最適。

Y 廿変複合動詞「案ず」には〈①あれこれ考える ②心配する〉の意味がある。よって正解はイ。ウは、事情を聞いた空阿弥陀仏が「急ぎ折るべきぞ」と解決策を提示しているところから、「困って」とするだけでは不適切。

☑ 傍線部を正確に解釈できたか

☑ 文脈を踏まえて登場人物の状況を押さえられたか

☑ 注を踏まえて解答要素に反映できたか

問四

まず、傍線1を分解すると、次のようになる。
「おほかた／心得／がたく／て」

「おほかた」は副詞で、打消の語（ここでは「がたく」と呼応して〈少しも（……ない）〉という全部否定の意味を表す。「心得」は、ア行下二段活用動詞「心得こころう」の連用形で、意味はほぼ現代語と共通す

るが、ここでは〈理解する〉の意味。なお、ア行下二段活用動詞は、「得」と「得」の複合動詞「心得」「所得とく」（＝よい地位を得る・得意になる）などに限られる。「がたく」は形容詞「かたし（難し）」が「がたし」と濁音化し、動詞の連用形に付いて接尾語の働きをして、〈……しにくい〉の意味となる（例 言ひがたし・忍びがたし）。以上から、傍線1は〈まったく理解できなくて〉の意味となる。

さて、ここは「弟子ども」が「心得がたく」思った理由を問うているが、まず「弟子ども」は何を〈まったく理解できなかった〉のかを説明する必要がある。そこで、傍線1までの文脈をたどってみよう。

「この者（＝鎌倉武士）」の寝所で「夜な夜な女と物語をしける音」がする《原因》

←

「弟子ども」は「心得がたく」思った《結果》

ここから「弟子ども」は「夜な夜な女と物語をしける音」を〈まったく理解できなかった〉とわかり、次のような解答をつくることができる。

夜ごとに女と話をしている声がしたから。

では、このことがなぜ〈まったく理解できなかった〉に結びつくのかというと、そこから先は読者に自明のこととして説明されていないので自分で推測するしかない。ここが本問の求めている核心である。

「鎌倉武士」は「入道して高野の蓮華谷」で「行ふ（＝仏道修行を積んでいる）」身である。高野山は仏教の聖地である（「注」参照）が、

仏道修行の場は、当然女人禁制である。女がいるはずもない仏道修行の場で「夜な夜な女と物語をしける音」がするので「弟子ども」は不審に思ったのである。女人禁制という背景が「心得がたく」思う根拠となっている点を踏まえて解答をつくると、次のようになる。

（女人禁制で）女がいるはずのない仏道修行の場所で（夜ごとに）女の声が聞こえたから。

ここは女人禁制というところまで一歩踏み込んだ読解を期待したいところである。

☑ 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換えられたか

問五 まず、傍線2を分解すると、次のようになる。

「ふるさと／＼の／事／の／おぼつかなさ／も／語り」

「ふるさと」は〈①生まれ故郷 ②なじみの土地 ③旧都・以前都が置かれていた土地〉の意味。ここは故郷の鎌倉に残してきた「女（＝妻）」と話をしている設定になっているので、①の意味。「おぼつかなさ」は形容詞「おぼつかなし」が体言化したもの（「さ」は形容詞・形容動詞の語幹に付いて、体言化する働きを持つ接尾語）。「おぼつかなし」の「おほ」はほんやりしている状態を表すのが原義で、そこから〈①はつきりしない ②気がかりだ・不安だ ③待ち遠しい〉の意味になる。ここは妻一人を残してきた鎌倉のことについて話しているから、②の意味で、「おぼつかなさ」は〈気がかりであること〉と訳せる。

以上から、口語訳は〈故郷のことが気がかりであるということも話し〉となる。

☑ 文脈を踏まえて登場人物の状況を押さえられたか

問六 傍線3は空阿弥陀仏が男に理由を尋ねている会話文にあたり、男は直後でその理由を答えている。したがって、どの部分が男の回答の核心になるかがわかればよい。

「など3おそろしげに思ひたるぞ」《空阿弥陀仏の疑問》

←

「その御本尊の御前に、かの女房がまうで来て、我を世にうらめしげに見て候ふが、……あまりにおそろしく」《男の回答》

傍線3の「おそろしげに」と男の回答にある「あまりにおそろしく」が対応していることから、「あまりに……」の前の部分が核心となるとわかる。この部分の趣旨をとらえているのは、イ。

☑ 多義語・古今異義語を文脈に沿って解釈できたか

問七 選択肢はいずれも形容動詞であるが、それぞれの意味は次の通り。

ア「あはれなり」 ①しみじみと心を動かされる ②情趣がある

③悲しい・気の毒だ ④かわいい・いとしい

イ「いたづらなり（徒らなり）」 ①無駄だ・無益だ

②手持ちぶさたである

ウ「なほざりなり」 ①いい加減だ・おろそかだ ②ほどほどだ

エ「ふしぎなり（不思議なり）」 理解を超えている・不可解だ

さて、空欄にはどの語が該当するだろうか。語句はすべて文脈の中で生きているものだから、ここも文脈をたどって推理すればよい。

「空阿弥陀仏……失せにけり」（ℓ11～13）

← 〓 空阿弥陀仏の念仏の法力で女の顔が真つ二つになって砕け散った

←

女（〓妻）が男の前に幻となって現れていたことが判明

←

「天魔のしわざか……ゆゑにか」（ℓ15）

〓 作者が、**天魔のしわざか、それとも男（〓夫）を恋しく思**

う女の心のせいなのかと二つの理由を推測

←

「いと **A**」

作者が推測している理由が、夫を恋しく思う妻の心^々だけならア「あはれなり」も考えられるが、作者は同時に「天魔のしわざ」という、**人知を超えた存在の力も想定している**。したがって、作者はこの**事態を不可解な出来事と理解している**ことが読み取れる。正解はエ「ふしぎなり」。

道だけが見て、いっそう恐ろしくて、ぴよんぴよんと上に跳びはねたが、その後はもとの（平常）心にかえって仏道修行をした。念仏の法力のありがたさを、ますます人々は尊く思い合った。（人間の）本体（である方）の女は、まったくそのようなこともなくて、もとのように鎌倉にいたということだ。天魔のしたことであろうか、それともまた、妻が（夫である入道を）恋しいと思ったためであろうか、実に

A 不思議なことである。

まとめ

- ・ 文法事項を押さえる
- ・ 多義語・古今異義語を文脈に沿って解釈する
- ・ 傍線部を正確に解釈する
- ・ 文脈を踏まえて登場人物の状況を押さえる
- ・ 注を踏まえて解答要素に反映する
- ・ 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える
- ・ 仏教説話の展開を踏まえて読む